心理学は人間が「わかる」か

山本　政人

「子どもがわからない」と昔からよく言われてきた。これはそういう問題提起をし、子どもを理解する努力をしようという掛け声のようなものだったと思う。今でも子どもはわからないと言えばわからないし、わかると言えばわかるように思える。

以前「概念装置としての子ども」という記述をしてしまい、それは何かということになってしまった。私としては深い考えもなく、うっかり使った言葉だった。しかし指摘されてみると、すごいことを言っているような感じもしないではない。いや、すでに誰かが言ったことがあるに違いない。誰が言ったのかは寡聞にして知らないが。

「子どもを理解する」というのは、目の前の具体

的な他者としての子どもを理解することではなく、私たちの内に何らかの「子ども像」ができ、それと目の前の子どもとを重ね合わせると、それがぴったりではないにしても、かなりきれいに重なるということではないだろうか。「子ども像」ができなかったり、できても目の前の子どもとうまく重ならないと、「子どもがわからない」ということになるのではないだろうか。

笑い話だが、ある保育所に行ったとき、保育者が私のことを子どもたちに次のように紹介した。「この先生はね、心理学の偉い先生なのよ。みんなの考えていることがわかるのよ」。

私は冗談ではないと思ったが、保育者はいたって真面目だった。傑作だったのは、子どもたちの反応である。

「へえー、じゃあ僕の欲しいものとかわかるんだ。ぼくの欲しいもの何だ」と一人が言うと、われもわれもと子どもたちは私に問うてきた。ここで「すみません。私にはわかりません」と謝ってしまっては話にならないから、当てずっぽうを言ってみた。もちろん悉くはずれである。子どもたちは喜んだ。「心理学の偉い先生」なんて、子どもたちにとってはそんなものだろう。

保育者が言った「偉い」と「みんなの考えていることがわかる」は余計だった。私が当てずっぽうを言っても、子どもたちは笑ってくれた。これが相手が大人となると、笑ってすまされなくなる。子どもを「理解」しなければ、責任を問われることにもなりかねない。

本音を言うと、相手が大人でも当てずっぽうを言っている。しかしそれがすぐに「はずれ」だということがばれないようにいろいろと工夫をしている。

工夫その一

「専門家」であることを強調する。「素人」の知らないことを知っており、わからないことがわかるという顔をする。そのために一般には使われない専門用語を使い、それについて質問が出ると、「よしよし。素人なのだから知らないのも無理はない。教えてあげよう」と用語の説明をする。

工夫その二

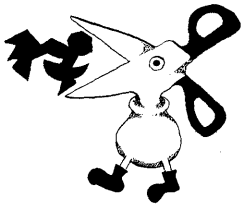
とりあえずしゃべりまくる。相手を完全に「聞き手」の立場にし、こちらの言うことを一方的に聞かせる。できるだけ断定的な言い方をし、自信のないところは「～と言われています」とごまかす。

工夫その三

「結果はすぐには現れないから、気長に様子を見ましょう」と言って、結論を先送りにする。

こうしておけば自分が言ったことが間違っていたということはすぐにはばれない。もしばれても、そのころには責任を問われる立場にいない。

こんな姑息な真似をしているのは私ぐらいだろうか。しかしこんなことをするのは「子どもがわからない」と親や保育者に言われて、「私にわかるわけないでしょ」と言う勇気がないためではない。「それを言っちゃあ、おしまいよ」と思うからである。最初に述べたように、「子どもがわからない」というのは、わかろうとする努力をしたいというメッセージなのだと思う。それに対して、当てずっぽうにせよ、何か答えを提示することは、励ましになると同時に、考えるきっかけになるのではないかと思うのである。



心理学は今、その力量をはるかに越えた過重な期待を掛けられている。「人の心がわかる」なんて、いつからそんなことになったのか。それこそ概念装置であるモデルは古くからある。フロイトではイドや超自我が描かれたあの説明しがたい図が、ユングと言えば普遍的無意識と個人的無意識が入れ子になった図が、エリクソンだと「基本的信頼　対　不信」なんていうのがずらりと並んだ表が出てくる。心理学はそうした図表に事欠かないが、それと目の前の人間が何を欲しているかを理解することは全く別問題である。

しかし私たち心理学者はなかなかしたたかで、目の前の人間が何を欲しているかをもわかるような顔をする。子どもとはこういうもので、こういう風に発達するという話をする。これも一つの概念装置である。それが目の前の子どもに当てはまるかどうかは、「当たるも八卦、当たらぬも八卦」みたいな気がする。

気がつくと、人間を理解し、わかることが心理学の本領であるかのような話になってしまっていたが、本当にそうなのかということから考える必要がある。心理学がこれまで提示してきた概念装置と現実との不整合から考えると、心理学がなし得ることは、「わかる」ことではなく、せいぜい「わかる」とはどういうことなのかを自覚することであるように思える。

そう、子どもや人間を「わかる」、あるいは「理解する」とはどういうことなのだろう。もちろん私のように当てずっぽうを言うことではない。心理学が行ってきたのは、とりあえず人間とはこうであるというモデル＝概念装置を作り出し、それに実際の人間を当てはめることだった。しかしうまく当てはまらないケースが続出し、軌道修正を迫られ続けてきた。軌道修正のやり方に

は二通りあって、新しいモデルを作り出す（新しいように見えて、実は古いものの焼き直しが多いが）というのと、古いモデルに戻るというのがある。心理学の歴史はその繰り返しである。

心理学に悲観的になっているわけではない。モデルを取っかえ引っかえしながら、努力を続けていることは重要である。私個人もかつては答えを求めていた。しかし今は答えはない、少なくとも見つからないと考えている。答えが見つからないのだから、たとえ当てずっぽうであっても、努力をすることに意味があるという考えである。そういうことを学生にも一般の人々にも伝えたいと思うが、なかなかできない。彼らの期待を裏切るし、心理学への不信感を生じるかもしれないという恐れがあるためである。

しかし恐れと言うか謙虚さは持っておいた方がいいと思う。学生が「××っていうのは○○っていうやり方で治るんだって」などと気楽に話しているのを聞くと、それこそ恐ろしくなる。「○○」なるやり方が、私の当てずっぽうとどれほどの違いがあるのかとまでは言わないにしても、それは「○○」そのものよりも治そうとする努力にこそ意味があるのだと言いたくなる。

心理学の概念装置もこれだけ世の中に浸透すると大きな影響力を持つ。ストレス、トラウマ、アイデンティティ、……。現代人はそういう概念のなかで生きている。それらは人の心のあり方を規定してしまっているとも言える。だとすれば、心を理解するためには、概念装置を理解し、それを作り出している心理学を理解することが必要だろう。

心理学をしていることと心理学を理解していることは違う。誤解を恐れずに言えば、心理学者が心理学を理解しているとは限らない。心理学を理

解している心理学者はそう多くはないかもしれない。心理学を理解していると思われる心理学者は、たとえばヴィゴーツキー（知り合いの某氏が「ヴィゴツキー」ではなく「ヴィゴーツキー」と表記すべきであると常々主張しているので、それに従う。すると何やら「通」になったような気になる）である。彼は「心理学の危機」という指摘を行った。反射学から了解心理学までの極端な唯物論から観念論の間に細かく分裂した心理学の状況を憂慮したものである。しかし彼自身がその状況をどうにかしようとしていたのかどうかはわからない。

最近の人ではスターンが挙げられる。彼は精神分析学をベースとしつつ、実証的心理学を重視している。彼は『乳児の対人世界』の冒頭で「臨床乳児」と「被観察乳児」ということを言っている。「臨床乳児」とは、精神分析理論が作り上げたモデルであり、「被観察乳児」とは、心理学が実証的手段によって見出した姿である。前者が虚構で後者が現実であると決めつけるのは早計である。前者にも現実をとらえている側面があり、後者にも虚構の部分がないとは言えない。スターンはどちらもが必要であると言う。

「臨床乳児」も「被観察乳児」も、ともに人間を理解しようとする努力の証である。両方に目を配ったとしても、そこから導き出される仮説はまたさまざまである。それはさまざまな問題とぶつかりながら更新されていく。気がつくともとに戻っていたということもあるが、それでも理解のための一歩には違いない。

（学習院大学）